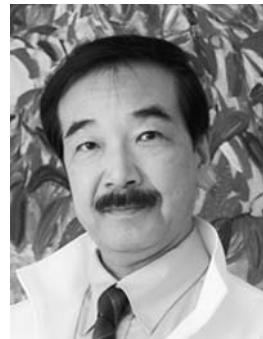


郡市医師会長に聞く

萩市医師会長
山本 達人 先生



萩市医師会と会長就任について

2024年6月22日萩市医師会会長に就任いたしました山本達人です。

医師になって39年目ですが、36年間は萩の医療に関わってまいりました。

長きにわたり萩の医療の移り変わりを身に染みて感じてまいりました。

さて、萩市医師会は昭和7年7月27日に創立され、現在、会員数71名（令和7年7月時点）で行政や保健福祉の関係機関等と連携を図りながら、萩市・阿武町の住民の皆様の安心・安全につながる地域医療の提供や健康増進事業を行っております。現在、日本全体の問題である人口減少、少子高齢化が、医療においては医師不足、医師の高齢化、診療科の偏在、医療格差に影響しています。山口県全体では若手医師の減少によって救急、急性期医療の維持が厳しい状況です。では、医師少数スポットに指定された萩ではどうでしょうか。高齢化率46%と日本の20年未来に行く萩医療圏において医療環境の変化は急峻であり迅速な対応が急務であり適切な処方箋を切らないと取り返しがつかない状況です。2004年（平成16年）の新医師臨床研修制度の開始以来、常勤医師数の激減と診療科の撤退により萩の急性期医療は脆弱化し今や2次救急医療は存亡の危機に瀕しています。さらに、新規開業がなく診療所医師の高齢化により一次救急在宅輪番制の維持が困難になりました。時代や地域を問わず、求められる理想

的な医療は救急医療にはじまり、住民が安心して健やかに生活でき、幸せな最期を迎える医療体制であります。この理想の医療こそが地域の最重要インフラであります。その存続が危ぶまれております。この変化に対応すべくいち早く、2009年（平成21年）の地域医療再生計画から始まった中核病院形成は政治によって翻弄され、いまだ実現しておりません。このように萩市医師会は救急問題と中核病院形成遅延という最大の難題に直面している中で、中核病院形成の当事者である病院の院長があえて火中の栗を拾いに行く覚悟をもって医師会長に就任いたしました。萩市医師会では勤務医が会長職に就くのは初めてのことと思われます。

地域医療を存続しかつ推進するために会長就任時に萩市医師会事業計画として以下の5つの事業を立案いたしました。

- ①救急医療の存続と急性期医療の維持
- ②新興感染症に対する感染症医療体制の構築
- ③局地災害に対する災害医療体制の構築
- ④看護職員の確保対策
- ⑤医療DX推進体制の整備

計画立案後1年経過しましたが、完結された事業はございません。特に①救急医療の存続と急性期医療の維持と④看護職員の確保対策は課題が多く一朝一夕に解決できる問題ではなく、市町行政との協働が必要であると実感しております。

引き続き医師会員の協力のもと事業計画を推進

するとともに20年先を見据えた萩医療圏のさらに広域に山陰の医療連携を見据えた展開を構想したいと考えております。

今後とも県医師会、郡市医師会の先生方と連携を密にし、課題解決に向けて尽力したいと思いますのでご指導のほどよろしくお願ひ申し上げます。

さて、私が医師会長に就任以降、衆議院選挙、地方首長選挙、参議院選挙を経験いたしました。これまで政治に無関心ではありませんが選挙活動に邁進したことはなく「勤務医には関係ないな」と一蹴していた感は否めません。2つの国政選挙では過去の自分同様、病院職員の選挙に対する関心が極めて低いことを改めて実感しました。しかしながら、院内で地道に「草の根の要望を政策に反映させるためには政治介入できる数の力が必要である」と訴えることで少しずつ後援会入会者が増えていく感触を得ました。「大票田は病院にあり」を今回の後援会活動で感じました。今後、日本医師連盟が選挙に勝利するためには、選対法を熟知し他の病院団体と協働で医政活動を病院勤務医に拡大することが重要ではないかと感じました。

自身について

私は愛媛県の出身ですが、身近に宇部市医師会元会長の矢野忠生先生をはじめ山口大学出身の先生方がいらっしゃったことに影響を受け、山口大学に入学しました。その先生方に地元愛媛のフグ専門店で合格祝いを開催していただいたことを昨日のことのように記憶しています。1987年(昭和62年)に山口大学を卒業し山口大学第2外科(現在の消化器腫瘍外科)に入局し大学院に進みました。

萩とのかかわりは、1987年都志見病院の手術室から始まりました。同年に第2外科の教授として着任された鈴木 敏先生が都志見久令男先生と京大外科同期という関係から手術助手のアルバイトが始まり、萩を訪れるようになります。当時、大学でも年に数例しか行っていなかった肝切除が普通に行われていることや心臓手術が行われていることに驚愕とともに、都志見病

院に大変興味を持ちました。その後、1989年から玉木病院に非常勤として派遣され、1990年には玉木英介先生と外科医冥利に尽くる救命手術を経験しました。そして、1991年山口大学から初めての外科常勤医として都志見病院に派遣されました。2年間の勤務の後1993年に徳山中央病院に転勤となりましたが、都志見先生のご配慮で1995年再び都志見病院に戻ってまいりました。医師になって徳山中央病院の2年間を除いた36年間にわたり萩の医療に携わったことになります。

私の外科医としてのスタートは山口大学第2外科ですが、都志見病院では京都大学と島根大学の先生方、玉木病院では島根大学と久留米大学の先生方、そして徳山中央病院では山口大学第1外科の先生方と手術を通じて親交を深めることができました。外科医としての今があるのは外科の道に導いていただいた、愛媛にいらっしゃった山口大学出身の先生方をはじめ多くの優秀な外科医との邂逅であったと感慨にひたるとともに、そろそろ外科医の幕を下ろす準備をしなければならないと思っております。

プライベートは自然と戯れるのが好きで、これまでスキューバダイビング、アイアンマンレース、マラソン・ウルトラマラソン・トレールランニング、スキーなどを経験してまいりましたが、2022年12月マラソン中に心肺停止になりAEDのお世話になって以来過激なスポーツは控えております。最近ゴルフを再開しようとした矢先、萩のゴルフ練習場が閉鎖されがっかりしております。また、萩に転勤になる際に船舶免許を取得し日本海でボートフィッシングを楽しんでおりましたが、2020年8月海難事故に遭遇しボートが転覆し廃船になりました。幸いにも乗船していた外科医4人はかすり傷程度でしたので、懲りずに新たなボートで日本海に繰り出しております。現在、医療も漁業も安全操業を心掛けておりますので日本海で釣りを経験したい方はお気軽にお声掛けください。